

2013年10月26日(土)

富山県民会館 304 号室

14:00～15:30

## 「それでも“歌”は海峡を越えた—激動の日韓文化交流史」

富山大学人文学部

准教授 林 夏生 氏

### 1. 韓国で大ヒットした「千と千尋の神隠し」

韓国で 2002 年の夏に公開された宮崎駿監督の「千と千尋の神隠し」は、封切りから 1 カ月余りで 170 万人という、韓国で劇場公開された日本の映画としては最高の観客動員数を記録した。「神隠し」という言葉は韓国語にはないので、「行方不明」と訳されている。映画では久石譲さん作曲の音楽はプロオーケストラの演奏で非常に印象的だった。しかし、あのサウンドトラック版（韓国では OST 版）を韓国で求めると、21 番の主題歌



「いつも何度でも」がカットされている。非常に美しい曲だが、歌詞が韓国の法律に抵触しているということで、「いつも何度でも」はこのときは国境を越えられなかったのである。

日本大衆文化の開放が始まったのは、1998年にキム・デジュン（金大中）政権が誕生したときだった。彼は、任期中に初めて北朝鮮との首脳会談を実現させ、朝鮮半島の安定化に寄与したということで、韓国で唯一のノーベル賞を受賞している。しかし、その後南北朝鮮の関係が好転したわけでもなく、裏で随分お金を与えていたことも今は判明している。しかし、この政権が登場したときは非常に華々しかったし、期待もされていた。それまでは軍事政権が続いていたが、その中で韓国を民主化しようという運動を起こしたところ、韓国の中央情報局・KCIAによって東京のホテルで拉致されて、傷だらけでソウルの街に投げ出された事件をご記憶の方もおられると思う。

キム・デジュンが行った日本大衆文化の開放とは、1948年8月15日の韓国建国以来、半世紀余り禁止されていた日本の漫画、映画、アニメ、音楽、コンサートなどを段階的に開放していこうというものだった。これは2002年に開催を予定されていたサッカーの日韓ワールドカップを意識した政策で、1998年に第1次開放として、出版に関しては完全開放、劇映画とビデオソフトに関しては、カンヌ映画祭やベルリン映画祭などで賞を取った映画だけに限定して開放を決めたのである。そして、最初に公開されたのは、黒澤明の「影武者」ではなく、北野武監督の「HANABI」だった。

その後、1999年には第2次開放として、日本人歌手のコンサートが2000席以下の室内公演に限って開放され、2000年の第3次開放ではコンサートの完全開放と劇映画の「18歳以上観覧可」の作品を除いての開放が実現した。



## 2. 小泉政権誕生で高まった反日感情

しかし、2001年に日本で小泉政権が登場すると、状況が変わってくる。小泉氏は自民党の議員内ではあまり友達がいなかったが、一般国民の自民党員の投票を圧倒的に集めて政権に就いたのだが、彼は自民党総裁選に立候補したときに、「当選したら靖国神社に参拝する」と公言していた。また、偶然ながら2001年は教科書検定の年であり、竹島（独島）の扱い、歴史認識の問題が話題となった上に、日本では比較的右派とされる団体が新しい教科書を出してきた。この教科書は最終的にはほとんどの学校で採用されなかったにもかかわらず、韓国で大きな誤解を生むことになったのである。なぜなら、当時の韓国は国定教科書制で、教科書は一つしかなかったため、日本で戦争を美化する教科書が検定を通ったというニュースを聞いて、日本国民全員がそれを学習するということだと誤解したのである。韓国のメディアでは多くの報道番組が作られ、2001年には「日本、許すか」という風潮が生まれた。しかし、ワールドカップ後の2004年に日韓関係がようやく修復されて、第4次開放で日本の大衆文化が完全開放されることになる。

私は韓国に1996～1997年の2年間留学していた。当時は、キム・デジュンの1代前のキム・ヨンサム（金泳三）大統領の時期だったが、IMF通貨危機で韓国経済は混乱を極めていた。その責任をめぐって国内の世論が分かれる中、国論が二分される時代に国民の気持ちを一つにする常套手段として、竹島の帰属等をめぐって日本たたきが始まっていたのである。2013年10月現在も、韓国大統領府の前には独島の写真が飾られている。また、3月1日の三・一独立運動の日、8月15日の韓国の建国記念日は韓国では休日になっているが、私も当時、日本人留学生は外出しない方がいいと忠告されていた。しかし一方で、東京大学時代の韓国人先輩に、カラオケ屋という看板を出していない地下カラオケ屋に誘われ、「ブルー・ライト・ヨコハマ」「乾杯」「ギンギラギンにさりげなく」は韓国でも大流行したので、韓国人は皆知っているという話を聞いたことがある。

## 3. 20年以上放送禁止になったイ・ミジャの「椿娘」

規制と開放政策の狭間で犠牲になったのが、「韓国の美空ひばり」と言われるイ・ミジャである。これから1999年にNHKの特番で放映されたイ・ミジャのビデオをご紹介します。当時の時代背景に迫っていきたい。

(ナレーター) イ・ミジャさんの最大のヒット曲、「トンベク・アガシ (椿娘)」を聴いてください。この曲は1965年から20年以上にわたって、歌うことが禁じられてきました。

この歌は韓国人作詞、韓国人作曲、韓国人の歌手と100%韓国産だが、日本の演歌のようである。

(ナレーター) イ・ミジャさんが生まれた1941年、朝鮮半島は日本の植民地支配の下にありましたが、4歳の時にそれが終わりました。そして1950年、ソウルは朝鮮戦争の戦火に包まれます。

イ・ミジャは本当に食べることができない時代を過ごしたわけだが、そんな彼女がシンデレラストーリーを生むのである。

(ナレーター) その才能が見いだされたのはイ・ミジャさんが高校3年生の時、1964年に大ヒット曲「椿娘」が生まれ、1年のレコード売り上げの7割を占めました。

ところが、1963年のパク・チョンヒ (朴正熙) 大統領の登場によって、この歌が禁止されるのである。パク・チョンヒ (朴正熙) は、現在のパク・クネ (朴槿恵) 大統領のお父さんである。

(ナレーター) 1948年の建国以来、韓国は日本の植民地時代の影響を排除し、韓国独自の文化を守り育てようとしてきました。音楽の公演や放送などを制限する倫理委員会が相次いで設立され、外国語の文化、中でも日本文化が否定されました。日本語の歌はもちろん、倭色、つまり、日本的だとされた曲はそれだけで歌うことが禁じられたのです。

倭色 (ウエセク) の「倭」とは、昔、中国から日本を見るときに蔑称として使われた字で、卑小という意味があり、日本人に対して、ののしり言葉として「ウエノム (倭奴)」という言葉が3月1日や8月15日に後ろから投げ掛けられることもある。これが1962年に成立したパク・チョンヒ政権の初期の状況だった。パク・チョンヒは軍事クーデターで政権を握った人物で、政府に刃向う者に対しては平気で武器で攻撃するし、民主化デモにも催涙弾を使って死亡者が出ているのだが、結構民衆に人気があった人物である。実際に、彼の時代に韓国は年率20%に近い経済成長を遂げた。それはソウルを流れる河の名を取って「ハンガン (漢江) の奇跡」と呼ばれている。

「あのころは厳しいこともあったが、夢があった。もう一度あのような時代になってほしい。パク・チョンヒの娘なら応援しよう」ということで、今回、年配の人を中心にパク・クネに投票した人が多いといわれている。ただ、若い人はそうではないので、正直言ってパク・クネさんは大変だと思う。それで、日本の方へ国民の気持ちを向けようというありがちなパターンが生まれていると思っている。

(ナレーター) 日本の演歌の多くは、7音階の中から、4番目と7番目の音を抜いた、通称「ヨナ抜き節」で作られています。1965年、「椿娘」はこのヨナ抜き節で、倭色ではないかという声が挙がります。

1965年、日本と韓国は一つの時代の節目を迎えていました。パク・チョンヒ大統領は日本との関係改善を図ったのです。韓国国内では政府の姿勢に対し、反対の声が挙がります。国交正常化に伴って、韓国政府が日本から得た経済援助に対して、植民地支配の清算をしないまま、金で国を売るのかという強い非難が全国的に広がっていったのです。

そんな中、イ・ミジャさんは新たな活躍の場を求めて、日本へと旅立ちます。しかし、日本で公演をするイ・ミジャさんが日本語で歌ったことが韓国で問題となります。また、日本のマスコミがイ・ミジャを李美子と紹介していることが伝えられると、韓国で批判がさらに高まりました。

日本は、朝鮮半島の植民地支配の最後のころ、中国へどんどん戦線が広がるのに伴い兵隊が不足し、植民地の人にも兵隊に行ってもらわなければならなくなり、民族名を使わない創氏改名や、天皇崇拜、日本語教育を推し進めていたのである。従って、イ・ミジャが日本名で紹介されていることは、朝鮮半島の人にとっては辛い思い出に直結することだった。

(ナレーター) 1966年、イ・ミジャさんが日本から帰国すると、「椿娘」は韓国国内で放送禁止、さらにレコードの販売も禁じられることとなります。理由は倭色だというものでした。

#### 4. 日韓国交正常化の犠牲となった人たち

パク・チョンヒ大統領が日本との国交正常化に踏み切ったのは、朝鮮戦争で疲弊した韓国を建て直すためには莫大な資金の投入が必要だったからである。アメリカも東アジアの戦略として、日本を二度と戦争ができない国にして、朝鮮戦争の後方基地として物資と金を供給する役割を持たせようとしていた。一方、韓国にはある意味、命懸けで北朝鮮の侵攻から守る役割を担ってもらおうとしたのである。パク・チョンヒは北朝鮮やソ連、中国との対抗上、アメリカの戦略に乗ることにした。日本については、おいおい何とかすればいいという考えだった。当時、日本から韓国に支払った金は6億ドルという天文学的な額に達したが、日本はそれを払う代わりに二度と韓国の方から金を要求しないほしいと言い、韓国もそれを了承して、全て解決済みのものとするということを書面に書き込んで、両国の国交正常化が実現したのである。

しかし、それは韓国の国民が全員納得済みで選んだことではなかった。強いて言えば、アメリカの外圧をパク・チョンヒがうまく利用して、国を軌道に乗せようとしたと言える。従って、「私はそれで了承したわけではない」という議論がいまだに存在するのである。また、これは非常に微妙なところなのでメディアでは繰り返し報道されないのだが、日韓国交正常化のための秘密会議の文書が、50年の時を経て、今どんどん公開されている。実は、慰安婦という言い方がいいかどうかは別にして、日本軍によって辛い思いをした個人のために、日本側は個人補償のお金は渡していた。ところが、パク・チョンヒはそれをもらっ

ておきながら、個人に渡さず国の発展のために使うことにし、側近は肅清を恐れてそのことを黙っていたのである。

それが韓国で公になったときには大騒動が起きて、韓国国内でも裁判が起こっている。日本でそのことが報道されないのは、「これ以上言うとも関係が悪くなる」という日本人特有の考え方からである。一方、韓国人は思ったことは全て口にする。日本人と韓国人は顔もよく似ているが、価値観も同じと考えるとどこに何か誤解の背景があるのかなと思う。

パク・チョンヒは日本で教育を受けたことがあることから、日本好きなのではないかと言われることを恐れて、政治経済では日本と協力しながら、文化の面だけは「日本を絶対に許してなるものか」という姿勢を貫いたのではないだろうか。それが、日本文化の規制になったのだと思う。

**(ナレーター)** しかし、「椿娘」は世代を超えて歌い継がれていきます。1979年、日本の福田元首相が訪ねたときの晩餐会でパク大統領がイ・ミジャさんにリクエストした曲は「椿娘」でした。日本的ということで放送や公演が禁じられていたこの曲が、唯一歌うことが許された場所が大統領府でした。

この晩餐会には、凶弾に倒れた母の代わりにパク・クネさんが出席している。現在、日韓首脳会談が開かれなことがニュースになっているが、日韓の企業の商談はストップしていないし、防衛担当者の会議も継続している。ただ、パク・クネ大統領は「私は絶対に日本を許さない」というシンボルとして日韓首脳会談を拒否している。それは自分の一存でできることだからである。

## 5. 韓国人の日本への関心

日本全体を敵に回せば韓国が損をすることは、日本人よりも韓国人の方がはるかによく知っている。韓国の貿易額は右肩上がりに推移しており、韓国は世界に対して毎年黒字を出しているが、対日貿易に関しては韓国の赤字が続いている。韓国産のテレビ、携帯電話、車の部品は日本製のものが多いからである。日本の車会社は、中国で何かもめたときに日本車がターゲットになるから、自分のブランドが表に出なくともいいから、韓国の会社とODM提携をして部品を使ってもらうようにしている。また、サムスンの液晶テレビ、携帯電話の主要部品の6割ぐらいは日本の会社が特許を持っている。このことを韓国では中・高生ぐらいになると全員知っている。日本人はこのことをあまり知らないのだから、経済が韓国に追われているからTPPを早くやれと言っている。竹島のことで日本を許せないと言うなら、日本が「部品の輸出をやめる」と言えば韓国は大変なことになる。そういう奥の手があることを日本は黙っているのである。

一方、韓国ではみんなそれを知っていて、「さらに島まで取るの」というのが竹島問題なのである。韓国との貿易をやめれば日本の黒字は減るが、竹島を渡したからといって日本経済に重大な影響が出るわけでもない。中には、「もめるのなら、あげちゃえば」と言う人がいるぐらいである。それがまた、韓国は納得がいけないのである。自分たちがここまで気にしていることなのに全然取り合ってくれない。そこが腹立つのである。無視されるのは悔しいことである。

韓国と日本の世論調査を見ると、日本では韓国が好きか嫌いかが時々裏返っているが、韓国では嫌いがずっと上にいっている。私の持論は、好きの反対は嫌いではなく、無関心だ。日本人の大部分は韓国などどうでもいいと思っている。日本のネットの掲示板で嫌韓論が強まったときがある。そのとき、韓国は毎日そのことをニュースで報道していた。半分冗談めかして言うと、韓国ではこれがうれしかったのである。多くの日本人にとって韓国などどうでもよかったのが、好き・嫌いという感情を持つようになった。友達でも、「あいつ嫌いだと思っていたが、実はいい奴だった」ということがあるように、100%好きというのはあまりなく、好きと嫌いがどちらもあるのが当たり前である。ところが日本では、韓国を好きでもない、嫌いでもないという人が圧倒的に多かったのである。とにかく関心を持ってもらうことが大事である。その上で、冬ソナのロケ地へ行ってみると食堂で食べたご飯がおいしかった。「今度ちょっとキムチを作ってみよう」、キムチ作り講座へ行くと先生に片言で「あなた、もっと質問すればいい」と言われた。「私はもっと韓国語を勉強しよう」と、こうなるとどんどん文化の交流が盛んになるのである。

韓国が日本の大衆文化を禁止したのは、大好きだからである。多くの人が日本のレコードを買うからである。今でも何百万人の観光客が日本を訪れ、何万人もの留学生が日本に来ていることを忘れてはならない。実は、「竹島」が一番毒がない問題で、21世紀の禁止曲のようなものである。それをあまりこちらが頭に血を上らせてしまったら、かえって取り返しがつかないことになるのではないかと思う。